「たそがれ時のラブソディ」改題

バラ色の人生に乾杯！ 第26回

文 岩城祐子

人の逝き方は、何で決まるのか？

「都市型有料老人ホーム」の草分けオーナーが出会った愛燦々の人生たち

樋渡様（仮名・85歳）はとってもお元気な奥さまで、健康的で動作も活発でいらっしゃいますので、まさか人工肛門の方であった等とは夢にも思わず、驚きでございました。お若い頃には登山がお好きで、登山家団体のリーダーとして冬山にも登られましたとか。

「まあスゴーイ!!」と、私は感動したのでございます。私などは意気地がないもので、登山家と伺っただけで尊敬するのでございます。私も若い頃、レジャーとして登山が一番経済的で健康的なものと考え、初秋に登山をしてみようと企画したことがございます。ハイキングの延長線上にある、あまり高くない山を選びました。お隣りの奥様にも声を掛け、その奥様とお嬢様、我家の息子2人とあわせて5人で意気揚々と出掛けたのでございます。

お弁当、水筒、リュックサック、上質なスニーカーと装備も勇ましく、5万分の1の地図を片手に目的地の電車の終点駅に降り立ちますと、もう目の前は緑一色の山が、ガーンと立ちふさがっていました。そこが山の登山口だったのでございます。でも道は、眼の前ともう少し左に下った処と2か所ありました。どちらが地図に書いてある登山道なのか解りません。ハタと迷いましたが、私は「えい!! ママヨ」と、態度だけはリーダーらしく胸を張り、堂々と手前の道へと歩き始めたのでございます。道路の脇は大小様々な雑木が生い茂り、木々の枝には蔦類がからまり薄暗く、眺望が開けないもので、自信のないリーダーにとりましては不安で一杯でございました。

1時間程歩きました後に、道は崖の下で行き止まりとなっていました。横に小屋があり、「ダイナマイト倉庫、キケン近寄るナ」と大きな赤文字で書いてあるではありませんか。それはダイナマイト置場へ行く道であったのです。ハタと困りました。お隣の奥様もお嬢様も「疲れた、疲れた、休息したい」の一点張り。でもダイナマイト小屋の横では、休息場として不適ですし、引き返すこともできません。上を見上げますと、崖の上は開けていて、尾根のような感じです。尾根に出れば世界が見渡せるはず。前進しようと決心を致しました。「サア皆さん、この崖を登ればすぐそこが尾根です。尾根の見晴らしの良い処で休息します。もう少しの辛抱です。ガン張りましょう」。息子2人にはお隣りの奥様のお尻を押し上げて差し上げるよう命じました。お嬢様は「帰りたい、帰りたい」と泣かれますもので、なだめながら手を引き引きの崖登りですから、これも大変な仕事でございました。

息子達も母親の困難な状態を察し、汗を左右に飛び散らせながら、お隣りの奥様の大きなお尻を押し上げてくれております。すぐ上に見える尾根でしたが、道なき道の崖上りのため、約1時間の苦闘はそれはそれは大変なものでございました。やっと尾根に立った時、そこに広がる広大な景色はハッ!!と息をのむ感動が体中に走った程素晴らしいものでした。そこでゆっくりお弁当を広げ、ゆっくり休息して、帰路はたった15分で駅に下り着きました。

これが後にも先にもたった1回だけの登山経験でしたから、冬山なんてもう驚きだったのでございます。

樋渡様は心優しい方で、決して御立腹をなさいません。樋渡様のお隣りの鈴木様（仮名・92歳）はなかなか我慢な方で、奥様を3年前に亡くされましたうえに、医師からは肺癌と診断されておられます。多分健康がすぐれませんので気難しく、孤独で淋しそうでしたので、樋渡様にお友達になってあげて下さいとお願いしました。

鈴木様は樋渡様を御覧になった瞬間、妻だと錯覚をなさいました。気に入らないことがありますと、本当の妻になさっておりましたように、「オイ、馬鹿!!」とおっしゃいまして、手近にある品物を樋渡様に投げ付けられるのでございます。私のほうがハラハラ致しますが、樋渡様は笑って、「いやぁネ、うちの夫は何時もこれだから……」とおっしゃいます。こちらも御夫君と錯覚されておられるのでございます。そのうち鈴木様は次第々々に弱られ、歩けなくなり遂には言葉も出て来なくなりました。

肺癌の特徴でございましょうか、「オーオー!!」と叫ばれるだけです。昼も夜も目覚めれば「オーオー!!」です。

私共はライオンソングと申し上げておりますが、お近くのお客様には御迷惑と心配致しますので、ライオンソングが聞こえますと、すぐ伺うのです。しかし御用がある訳でもございません。只ジッ!!と少々虚な瞳で私を御覧になるだけとなってしまわれました。仕方がありませんので、子守歌を小さい声で歌って差し上げますと、トロトロとなられます。ヤレヤレと、ソッ!!と出て参りますと、事務室に着くや否や、「オーオー!!」とライオンソングでございます。鈴木様の御子息様からは、「母も癌で、病院で亡くなりましたが、あまりにも惨めで見るに耐えられませんでしたから、父はなるべく痛み止めだけの程度で、自然にして下さい」とお頼まれしております。

よくしたもので樋渡様も次第々々にお解りにならなくなり、鈴木様のことをすっかりお忘れになってしまわれました。

或る朝、「お食事でございます」と、樋渡様のお部屋にお迎えに参りましたら、トイレに座って全部きれいにお仕末をあそばして御他界になっておられました。それは「見事!!」とでも申し上げるしかない御最期でございました。

鈴木様はその後もライオンソングをお続けでございますが、どこも痛む訳でなく、お食事は車椅子でホールにお出ましし頂いて召し上がります。御他界になる3日前も「花ちゃんクラブ」と呼んでおります会合に御出席頂いて、私がお口迄お運びして、蒲焼御飯を1人前、お饅頭を5個、チョコレートケーキを3個ペロリと召し上り、御満足気にしておられました。その2日後、急に血圧が下り、意識が不鮮明になりましたもので驚き、御子息様にすぐ御連絡を申し上げました。運悪くその日は御孫様方の御家族を軽井沢に御招待あそばしておられる日でございまして、一寸お困りになられました御様子でございました。「この招待を終らせて明朝駆けつける……」と仰せになりお電話をお切りになりました。鈴木様はその夜半から、鼻、口からと出血が始まり、とうとう帰らぬ人となられました。それ迄の間、懸命にお電話を入れましたが電源が切ってありまして、とうとう繋がらなかったのでございます。

鈴木様の御子息様はとてもとても親孝行の方でいらっしゃいます。しかしお孫さまの御家族に比べれば、お父様のウエイトは軽かったのでございましょうか。御遺体のお仕末をしながらヘルパーさんは、「長く生きすぎたのでしょうか」とポツリと淋し気に私に洩らしました。

鈴木様はお若い頃からガン張って事業を興し財を成し、子はその財を相続したのに、鈴木様のお最期の時には電話の電源を切ったのです。

鈴木様は妻と妻かと錯覚した樋渡様の2人に先立たれ、本当に独りぼっちになられておられました。もうこの世に未練はお持ちでなかったのではないでしょうか。

山を登り崖を登って尾根から見渡したあの満足感!! あれが死後の極楽の世界の感じなのでございましょうか。樋渡様の御最期等も想い浮かべまして、「人はよい死を迎えるためによい生き方をしないといけないのです。……しかし鈴木様は天国で本当の奥様と樋渡様のお2人に囲まれて賑やかにお過ごしでしょうから」と鈴木様の御子息様に答えるに止めたのでございます。

岩城祐子

大正13年栃木県生まれ。昭和54年に都市型有料老人ホームの先駆けとなる施設を開設。平成13年に特別擁護老人ホームを、平成18年に高齢者長期滞在型ホテルを開設、独特の語り口調が特徴で、著書多数。

illustration : sakuma kana